

# 風土



## 田楽に盗まるる待つきのめあり

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

この句には「近藤書店主隣家より転居して十年その家いまだ空家のままなり」という面白い前書きがあります。「隣家」は七畳小屋の隣の家のことです。これを読むと、近藤書店を営んでいた主が引越してから十年経ち、その家はすつと空家のままで、庭の山椒の木が盗ってくれよとばかりに芽を出していることが解ります。「どうせ空家なんだからもつたいたいではないか。木の芽田楽で一杯やつてくれと木の芽が待っている」とばかりに桂郎師の手がむすむすするのです。さてこの後どうなったのでしょうか。

## 討ち取つたり屋床抜かむ筍を

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

桂郎師の七畳小屋は竹藪に囲まれています。床板が湿気で腐りやすいので、床下を調べることにしました。なんと筍が頭を出しているではありませんか。さっそく筍を掘り起こし、この侵入者に「討ち取つたりや」と声を挙げました。歌舞伎の見得を切つたような桂郎師が思い浮かびます。

## 干ぜんまい 太陽をもむごとく揉む

(句集『幻』より平成七年作)

これはみちのくの旅で得られた句です。このころ器師は、俳人協会の役員として、東北の俳句大会に講師・選者をつとめ度々訪れていました。「ぜんまい」は、蕨とともに春の山菜の代表ですが、「干ぜんまい」にするには手間をかけます。まず茹でて干し、手で揉んでまた干し、と何回も繰り返し返してできあがります。いま嬸が春の日差しを浴びながら莫塵の上でぜんまいを揉んでいます。それを「太陽をもむごとく揉む」と労わりの言葉を置きました。

## 赤ん坊の舌の強さよ牡丹の芽

(句集『幻』より平成七年作)

この赤ん坊は器師の娘さんの長女志織さんのことです。そして芽を張り出した牡丹の木は、娘さんが庭に植えたものです。器師は牡丹の句を数多詠んでいます。大半はこの牡丹に向き合って作られました。旺盛に乳を吸う赤ん坊の生命力を「舌の強さよ」と感嘆し、娘が植えた牡丹の朱色の力強い太芽に、孫の未来を重ねたのです。絶妙な取り合わせと言えます。

水尾と水輪と

南うみを

うら成りの南瓜はふる畑焚火

白菜の尻弾みくる猫車

雀らに葎よくしなふ冬至かな

大根干すきのふは網を掛けし竿

浜茹でのせこ蟹しやぶる蕪村の忌

くつさめのあとの目鼻を寄せもどす  
鎌を研ぎ鋤を洗へば年暮るる  
神木の洞の昏きを破魔矢過ぐ  
若菜籠底しつとりとしてきたる  
鴨の水尾にほの水輪のうち混じり  
寒に入る鴉いよいよ艶深め  
竹なべて寒九の雪にうなだれて



# 竹間集

同人作品



去年今年

高村令子

霧襖一村なべて宇宙基地  
落ち葉焚く一年の悔くべ足して  
長生きの辞書繰る遊び置炬燵  
三つ四つの駄句持ち寄り年忘れ  
湯上り嬰柚子の香残るバスタオル  
端折つて閉ざす句帳や去年今年  
山国の底は終の地初茜

酔心地

土井 三乙

月光と浸れり除夜の露天風呂  
去年今年波音を聴くばかりなり  
誰も居ぬ大浴場の淑気かな  
松の枝ばさと揺らして初鴉  
兜太言ふ「私が俳句」読始  
酔心地なれば自句など筆始  
寝てばかりゐたわけでなし早や五日

星冴ゆる

林 いづみ

うす雲の日を洩らしをり冬薔薇  
家古りてどこか鳴くなり今朝の霜  
一片の雲も許さず星冴ゆる  
しぐるるや両手につつむカプチーノ  
クリスマス昔も今も爪を染め  
数へ日の竹林奥に抹茶席

初山河

小林 共代

空よりも川の明るき初山河  
初神楽指が押さえる笛の穴  
流さるることを楽しみ浮寝鳥  
水鳥の羽より寒さ展ごりぬ  
十二月村に小さな美術館  
風呂吹の匂ふ嬬座の賑はへり  
父よりも母よりも生き冬至風呂

櫓の主

中根 美保

鳩歩む落葉の嵩を沈ませて  
滝の道ゆたかに濡れて初不動  
雪雲を支へてをりぬ雑木山  
舟棹の曲りて乾く寒風裡  
薪束ぬ畳の縁の余りもて  
おもむろに一本を足し櫓の主  
火胼胼除けの小布を膝に櫓の主

飛鳥Ⅱ

間島あきら

飛鳥Ⅱ舞踏キャビンやクリスマス  
人誰も祈りは天へ初あかり  
けあらしを割つて巨船のあらはるる  
初沖へ決意の漁夫の若き顔  
まず水を走らす包丁始めかな  
雪催ひ漁夫は魚断つ刃研ぐ  
吊さるる鮫鱈の腹ほたほたす

初霜

内藤 静

にほどりやどの子もすぐに仲間の輪  
まるまると荅のやうに浮寝鳥  
冬かもめ光となりて翻る  
葉は花を欺きポインセチア赤  
この年もかく過ぎ行ける柚子湯かな  
聴き分くる夫のテノール降誕祭  
初霜を歩む手を振り肩を振り

冬から春へ

田村すゝむ

冬から春へ 田村すゝむ  
生涯の家や千両の実の真つ赤  
警策の気配を寒の座禅堂  
正直な色に定まる竜の玉  
波の花越後子不知親不知  
暗闇にナイフの刺さる聖菓かな  
眠さうな音の間雪の水車小屋  
小倉山枯れ葉百枚空に撒く  
冬花火師の影逃ぐる間を炎が昇る



綿虫の一筋とんで消えにけり  
枇杷の花淋しく咲いて勝手口  
身辺を少し片すも十二月  
死ぬ為に生きてゐる日々もち冬か  
狂はずに生き透き通る寒の水  
予想より遙かに生きて去年今年  
本も読まず筆も取らずの寝正月  
壊される見て見ぬふりの白牡丹  
アルプスを背のトルソーに春の雪  
雪形に春の気配の白馬岳  
恋猫の叱られてゐる縁の端  
寒緩む今日の終ひの病日記

# 山河集

同人作品



## 南うみを選

初産迎ふ牛の起居や霜晴るる  
湯気立てて仔牛生まるる夜の雪  
雪の夜の母牛せつに仔牛舐む  
産終へて牛の目とむ冬の虹  
極月や母に押されて仔牛立つ

四方由紀子

マトリヨシカからこけしの里へ白鳥来  
冬桜宵深むほど華やぎぬ  
イルミネーション果てし闇行く寒さかな  
井戸に塩・米・酒供へ年惜しむ  
「恋すてふ」膝で押へて歌かるた

岡本尚子

癌告知インフルエンザより軽し  
病める身となりて紅葉火を放つ  
居眠りの夢見の果ての梢明り

瀬戸 薫

暖冬の予感木々の葉揺らす風  
墓囲む幕は紅白討入り日  
なまはげの藁を封書に初便り  
玄関に東の日差し鏡餅  
着膨れて産声を待つ夜明けかな  
産声の時刻を記すや初日記  
新しき命の鼓動冬の星

石井美智子

大釜は男まかせや大根焚  
大黒さん味見しに来る大根焚  
七十本大釜に入れ大根焚  
次々と割木投げ入れ大根焚  
一人づつ鍵持つて出る長き夜

島 玲子

# 風土独語／南 うみを



湯気立てて仔牛生まるる夜の雪

四方由紀子

一連の作品から仔牛の出産に立ち会って得られたものであることが解ります。雪に包まれた厩舎で母牛は最後の力を振り絞って仔牛を産み落とすのです。「湯気立てて」がリアルで、読み手も立ち会っているような錯覚にとらわれます。「いのちの誕生の湯気」に驚き見入る作者が見えます。

ラガートライ地に口づけをするごとく

高橋まき子

この句はラグビーの試合のトライの瞬間をクローズアップしました。ラグビーは、トライを目指しひたすら前へ進むスポーツです。そのトライを「地に口づけをする」と比喩しました。ラグビーの勝利の女神は「大地」なのだと思ひ手を納得させます。

マトリヨシカからこけしの里へ白鳥来

岡本 尚子

「マトリヨシカ」はロシアの代表的な木製人形で、大きさは違う人形を入れ子式に、それぞれの体内に納めてあります。実はこの人形は日本の「こけし」にヒントを得たものなのです。この「こけしの里」は東北でしょうか。今年も湖に白鳥がやって来ました。作者はふと「マトリヨシカ」の国と「こけし」の里を白鳥が繋いでいると感じたのです。

千波湖に足掛けてゐる松手入

山田 健太

この句の面白さは、「千波湖」の大きさに匹敵するように、「松手入」の職人の足を想像させるところにあります。実際は湖へ伸びている枝に足を掛けていただけですが、言葉の操作で読み手を楽くさせてくれます。

癌告知インフルエンザより軽し

瀬戸 薫

まず「癌告知」にどきっとします。それを「インフルエンザより軽し」と結んでいます。この「軽し」は医者からの言葉でしょうか。それとも作者の受け止めでしょうか。いずれにせよ作者の覚悟がひとと伝わります。

裏木戸を開け木枯に殴らるる

石井 秀一

この句は「木枯に殴らるる」と擬人化することで、木枯の激しさを読み手に伝えていきます。裏木戸を開けたとたん、木の葉まじりの木枯に頬を打たれたのです。この擬人化は成功したと言えるでしょう。

産声の時刻を記すや初日記

石井美智子

「産声」はこの世に生まれた赤子の最初の声です。その力強い第一声の時を日記に記す。それも「初日記」です。作者の職業を考えると、この「初日記」は仕事の日記でしょう。「初」のめでたさと命の誕生にかかわる仕事の自負が伝わります。(以下略)

# 風土集



## 南うみを選

鳥影の親しく見ゆる枯木かな 逗子 高橋まき子

ラガートライ地に口づけをするごとく

イヤホンを分け合ふ二人クリスマス

手に持つてポインセチアの置き処

初富士をカヌー横切る速さかな

路地深きより白息のまた一つ

千波湖に足掛けてゐる松手入

どんぐりのはさまつてゐる木椅子かな

短日や小太き声の占い師

古里に父の椅子あり冬たんぽぽ

水に置くごとく水鳥の来てをりぬ

裏木戸を開け木枯に殴らるる

水鳥のふんばりしまま流れをり

日溜まりの匂ふ落葉を掬ひけり

落葉して鐘の音近くなりけり

高橋まき子

山田 健太

石井 秀一

暗がりには小走りとなる師走かな 東京 奥田 茶々

落葉踏む歌詞の暗記を繰り返し

風呂吹をまんずまんずともてなざる

白鳥のしづかに滑る夜の川

足の爪手の爪切るも年用意

腹立たしき事も柚子湯に溶かし込み

時雨来てぼつと灯の入る屋台かな

解体と決まりし家に注連飾る

歩をとめてまた歩をとめて返り花

まだ少し眠りたいらし冬木の芽

トーストを焦がしてゐるや霜の朝

手品師の鳩を繰り出す聖夜かな

少年のテナーサックス冬薔薇

柚子湯して故なく涙出ること

浮寝鳥ここは源氏の池なるぞ

奥田 茶々

宇治 渡辺 やや

横須賀 平田きみこ